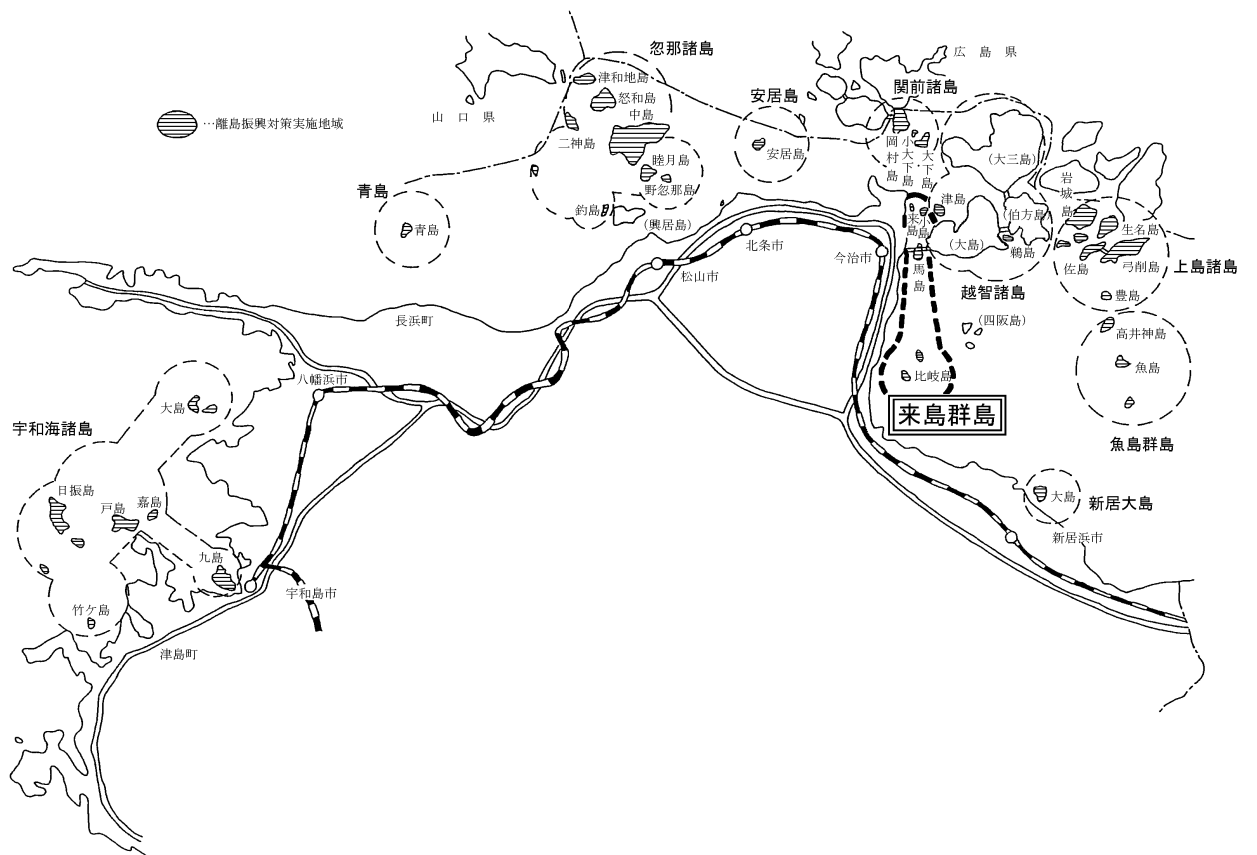


来島群島地域振興計画



第1章 地域の現況

概要

本地域には、今治市に属する小島（41人、0.50km²）、来島（38人、0.04km²）、馬島（34人、0.50km²）、比岐島（6人、0.30km²）の4つの有人島があり、その総人口は119人、総面積は1.34km²である。

往時、来島水軍のロマンに彩られた本地域は、瀬戸内海の多島海美や来島海峡の急潮など豊かな自然や平成11年5月に開通した瀬戸内しまなみ海道の四国側玄関口として知られ、今治市の沖合約0.2～6.5kmに点在している。

地形は平坦地が少なく、気候は温暖な多照寡雨で、平成12年の平均気温16.8度、年間降水量949mmである。

集落は、4有人島とも、島の海岸沿いの極小な平坦地や緩傾斜地に、それぞれ一島一集落を形成している。

人口は、平成2年では164人であったが、10年後の平成12年には119人であり、27.4%の減少となっている。また、65歳以上の老年人口比率は、平成2年では33.5%であったが、平成12年では59.7%となっており、高齢化地域である。

1 - 1 交通施設の整備に関する現況

本地域は、海の銀座と言われる来島海峡に位置し、いずれの有人島も小規模離島であり、生活面でほとんどの機能を本土今治市に依存している。

比岐島を除く3島と本土を連絡する航路は、各島の部落合同で経営している有限会社「くるしま」が、離島航路の指定を受け、毎日、小島へ10便、来島へ10便、馬島へ7便で運航している。今のところは円滑な運航が行われているものの、平成12年の3島住民の老年人口比率が61.1%と非常に高く、今後とも更なる高齢化が見込まれるなか、安定的な離島航路の運航確保が課題となっている。

また、小島、来島にはフェリー接岸施設がなく、満潮を利用して護岸に直接車両を乗り降りさせるなど、非常に苦慮している。

なお、比岐島においては、定期航路が無く、各戸が所有している自家用船を利用している。

来島、小島の島内道路については、幅員の狭隘な市道と農道しかなく、住民の生活、観光客の遊歩道散策等にはやや不便な状況である。

また、馬島においては、瀬戸内しまなみ海道の開通により、消防車、救急車などの救急車輛や住民の自家用車の乗り入れと自転車歩行車道からの自転車や徒歩でのアクセスが可能となった。なお、比岐島には市が管理する道路はなく、生活道のみがある。

1 - 2 通信施設の整備に関する現況

電話は、本土今治市より海底ケーブルが引かれ、ほぼ全戸に普及しているとともに、携帯電話の利用可能地域にもなっている。郵便、新聞については、小島、来島、馬島は本土同様のサービスを受けているが、比岐島は航路がないため、住民が郵便局からの受託により配達している。テレビ、ラジオの難視聴区域はないが、比岐島では自家発電による配電のため視聴時間が限定されている。

一方、市内で普及が進んでいるCATVなどの高度情報通信基盤については、資金的な課題等から本地域への導入見込みはたっていない。

1 - 3 産業振興等に関する現況

産業については、水産業を中心とした第1次産業が主産業であり、平成12年の就業者数に占める割合は44.0%（うち漁業就業者約28.0%）に達している。また、第2次産業、第3次産業の就業者は、本土今治市へ通勤している者がほとんどであるが、それぞれ8.0%、48.0%となっている。

平成2年には50.0%であった第1次産業の占める割合が6.0ポイント低下していること、第3次産業の割合が主産業である第1次産業を4.0ポイント上回っていることなどから、本土側への就業が進んでいることが推測される。

また、就業者数は、平成7年には54人であったが、平成12年には25人と、この5年間で29人、実に53.7%と過半数を超える著しい減少を示しており、本地域の活力の低下が非常に懸念されている。

農業は、比岐島のみかん栽培と馬島の花き栽培について、認定農業者制度の認定を受け、資金の借り入れなどの優遇措置を利用して積極的な経営が行われている。特に馬島では島の気象条件を生かし、露地やビニールハウスでトルコききょう、かすみ草、スイトピーなどを栽培して成功している。

水産業については、来島海峡の好漁場を生かした、鯛やすずき、あこうなど高級魚の一本釣りが中心であるが、水産資源の減少や後継者不足、魚価の低迷という問題を抱え、漁業経営は非常に厳しい状況となっている。このため、引き続き、魚礁の設置や稚魚の放流など栽培漁業を進めるとともに、「（仮称）くるしまダイ」など魚介類のブランド化や販路の拡大・開拓に力を入れ、漁家経営の安定化を進める必要がある。

また、釣りブームによって遊漁者が急増しているが、島内での観光漁業は育っておらず、むしろ漁場の荒廃や漁港内での漁業者と遊漁者のトラブルが懸念されている。

1 - 4 生活環境の整備に関する現況

生活用水については、現在、本土今治市から給水船により、通常1日1回、夏で2回、小島、来島、馬島へそれぞれ運搬され、貯水槽から各家庭へ給水されている。ま

た、比岐島については井戸水を利用している。生活用水は、良質で低廉な水を安定的に供給する必要があるが、給水船では悪天候時の運搬が困難であるため、海底送水管の敷設なども視野に入れた安定的な給水体制の確立が望まれている。

なお、馬島においては、来島海峡大橋に送水管が既に添架されているが、ポンプ施設が未整備であるため、今後、整備を進める予定である。

電気については、比岐島は自家発電であり、施設の耐用年数の経過による更新が必要となっているが、他の3島については、送電線により送電されている。また、プロパンガスなどの燃料については、民間会社が離島航路で運搬している。

ごみ処理については、比岐島では自家処理を行っているが、他の3島は離島航路により本土今治市と同じ収集体制が確立されており、本土今治市のごみと一緒に処理されている。

し尿処理については、小島、来島、馬島では単独処理浄化槽による水洗化がほぼ全戸に普及しているが、馬島を除いてはフェリーの接岸施設が無いいため、年間2回行われる浄化槽の清掃に使用するバキュームカーの運搬が課題となっている。比岐島については、すべて自家処理している。

コミュニティ施設については、各島に集会所があり、住民の寄り合いやレクリエーションの場として大いに利用されている。

消防施設については、それぞれの島に小型動力ポンプが整備されているが、初期消防は婦人、高齢者に頼らざるを得ない状況である。

1 - 5 医療の確保に関する現況

医療については、それぞれの島が本土近接型の小規模離島であるため、医療機関及び医療従事者は皆無であり、これらは全て本土に依存している。

救急医療については、島民の助け合いにより漁船等で波止浜港等に運び、待ち受けている救急車で救急病院に搬送している状況である。

住民の疾病予防対策としては、本土今治市の公民館等で各種検診を実施するとともに、島内での健康相談を実施しているが、今後、受検率の向上を図ることが課題である。なお、寝たきり老人宅へは、本土から保健師を全島に派遣し、在宅訪問指導を実施している。

1 - 6 高齢者の福祉その他の福祉の増進に関する現況

老年人口比率は59.7%と極めて高く、世帯構成についても、全58世帯のうち39世帯が高齢者世帯であり、一人暮らしの高齢者は18人（世帯）もいる。中でも小島が顕著で、24世帯中22世帯が高齢者世帯となっており、将来的には、コミュニティ自体の維持が困難となることも懸念されている。

なお、介護保険制度については、本土今治市とほぼ同程度のサービスが提供されている。

高齢者の生きがい対策としては、高齢者の社会奉仕活動への参加、各種生涯学習講座を通じた世代間の交流等が行われている。

1 - 7 教育及び文化の振興に関する現況

学校教育については、学校教育施設は整備されておらず、児童・生徒は定期航路で本土へ通学しており、今治市ではこれに対し通学補助を行っている。

生涯学習については、社会教育施設は整備されておらず、生涯学習や趣味の活動は本土今治市の波止浜公民館や図書館などで行われている。

地域の歴史・文化的遺産としては、来島には水軍城址などの遺構があり、地元住民を中心として平成11年に来島保存顕彰会が設立され、歴史顕彰や交流活動などが民間レベルで行われている。一方、今治市を中心として、今後、来島城址等の整備や活用方針について協議する検討委員会が立ち上げられる予定となっている。

また、小島には歴史的遺産として評価の高い日露戦争当時の芸予要塞跡があり、平成12年には今治市制80周年記念事業の一環として、「小島砲台の今昔（日露戦争の生き証人）」が歴史顕彰として編集されるとともに、老朽化の著しい旧発電所跡の修復が行われている。今後とも可能なかぎり維持補修に努め、文化庁の近代遺跡としての指定を目指すとともに、観光資源の一つとして、また、郷土の歴史学習の場として活用されることが望まれている。

1 - 8 観光の開発に関する現況

本地域は、日本3大急潮の一つである来島海峡に位置し、瀬戸内海国立公園区域の中心にあり、来島、小島が名勝波止浜に指定されているなど、風光明媚な地域として知られている。

平成11年5月に開通した瀬戸内しまなみ海道は、瀬戸内三橋にあって唯一、自転車歩行車道が整備されており、この自転車歩行車道を利用してウォーキングやサイクリング、スタンプラリーなどの様々なイベントが実施されているが、瀬戸内しまなみ海道全体の交通量が伸び悩んでいる状況であり、これらイベントを起爆剤として、この地域の魅力を全国へ情報発信することが望まれている。

また、歴史・文化的遺産である来島の城址や小島の芸予要塞跡など、豊かな歴史資源を有しており、これら史跡と豊かな自然をいかに観光資源として活用するかが課題となっている。

1 - 9 国内及び国外の地域との交流に関する現況

小島には、厚生省の「ウェルカムベビーキャンペーン」の一環で、平成6年5月に設立された「風の顔らんど」があり、今治市の姉妹都市である広島県尾道市や群馬県太田市をはじめ、全国各地の子ども達が訪れ、自然とのふれあいや地元の人々との交流を通じて、愛情や自由な発想、想像力を育むことを目的とした活動を展開している。

また、平成12年の小島砲台顕彰事業の際には、当時の歴史的背景から英国大阪総領事夫妻を招待し、地元との交流が図られた。

来島においては、来島保存顕彰会を中心として、大分県玖珠町など来島水軍ゆかりの地域との交流が続けられている。今後は、伊勢、熊野など他の水軍ゆかりのまちとの交流・連携が求められている。

1 - 10 国土保全施設等の整備に関する現況

本地域は、地理的・地形的特性から梅雨や季節波浪等により自然災害の脅威にさらされてきたが、海岸保全施設の整備や急傾斜地崩壊対策を計画的に進めた結果、近年、大規模な災害は発生していない。しかし、小島の海岸保全施設にあっては、老朽化や吸い出しによる護岸機能の劣化が生じており、その対策が求められる。

平成10年9月に発生した馬島の火災では、8.5haの山林が消失し、その翌年に植林が行われたが、植林した木が生長するまでには20～30年の長い年月が必要となるため、今後とも土砂の流出対策を含めた適切な管理が課題となる。

1 - 11 そのほか、離島の振興に関し必要な現況

本地域は、人口の減少や高齢化の進行により、定住人口の確保が課題となっている。

第2章 振興の基本的方向

内海本土近接型の小離島で、全ての分野にわたり今治市本土に依存しており、島内で生活・経済を自立させることは容易ではないため、本土今治市とのアクセシビリティの強化を図りながら、地域の特性を生かした産業を振興し、他地域との交流・連携を促進するとともに、快適で住みよい生活環境を確保し、『本地域の人が健やかで安心して暮らせ、多くの人を訪れる魅力ある地域づくり』を目指す。

第3章 計画の内容

3 - 1 交通施設の整備に関する事項

小島、来島の住民にとっては、離島航路が唯一の交通手段であるため、今後とも航路の存続と運航の維持改善、安全運行などに努め、通学、通院、通勤体制の強化を図る。併せて、離島航路の利便性、快適性の向上を図るため、待合所の設置に努める。

また、小島、来島にはフェリーの接岸施設が無く、車両の運搬に非常に苦慮しているため、その対策を検討する。

3 2 通信施設の整備に関する事項

情報通信については、本土今治市において、インターネットシステムの導入やCATVの普及など、高度情報通信基盤の整備が進展しており、本地域についても本土との情報格差是正のための方策について検討する。

3 3 産業振興等に関する事項

農業については、比岐島での糖度の高いみかん栽培、馬島での花き栽培など特色のある農業経営を促進するため、中核的農業者の育成を積極的に推進するほか、その基盤施設の整備に努める。

水産業については、漁業経営の安定化を図るため、行政、漁業協同組合、及び漁業者が一体となって、引き続き、稚魚の中間育成、放流、魚礁の設置等による漁業資源、漁場の確保に努めるほか、販路拡大のための「(仮称)くるしまダイ」など魚介類のブランド化についても検討を進める。

また、観光漁業や観光客への活魚料理の提供など、観光業と連携した漁業の振興方策についても検討するほか、漁場環境の保全のため違反漁業の防止に取り組む。

3 - 4 生活環境の整備に関する事項

生活用水については、馬島において、来島海峡大橋に添架されている送水管による給水体制の確立を目指す。

また、来島、小島については、給水船による供給を引き続き実施するとともに、天候状態に左右されず安定的な給水を行うため、海底送水管の敷設を目指す。

比岐島の自家発電設備については、耐用年数到来時に、その更新を実施する。

ごみ処理については、引き続き本土今治市と同様の収集処理体制を維持するとともに、比岐島における処理方策を検討する。

し尿処理については、フェリー等の接岸施設がない小島、来島へのバキュームカーなどの運搬のため、接岸施設の整備を検討する。

さらに、生活環境の向上、公共用水域の水質保全のため、生活排水を含めた污水处理について、検討を行う。

水防・消防面については、初期消防活動能力の向上を図るため、地元消防団の強化育成に努めるとともに、老朽化した小型動力ポンプの更新に努める。

3 - 5 医療の確保に関する事項

本地域には医療機関が皆無であるため、本土側での各種検診の内容充実や受診の奨励に努めるとともに、各島での健康相談の実施、寝たきり老人宅への保健師の訪問指導など、住民に対する保健予防、健康管理体制の充実・強化を図る。

救急医療については、離島架橋により陸路交通が可能となった馬島を除く3離島においては、それぞれの住民の連携の下、現体制の維持・強化に努める。

3 - 6 高齢者の福祉その他の福祉の増進に関する事項

急速に進行する高齢化に対応するため、個々の高齢者のニーズに見合った福祉サービスの充実を図るとともに、各種福祉サービス利用についての啓発に努める。

また、生活基盤の安定や活力ある地域社会の維持を図るため、健康な高齢者については、地域内だけでなく本土側での受入れも考慮に入れ、個々の経験を生かした就業や社会奉仕活動を促進する。

なお、介護保険制度については、本土今治市と同程度のサービスが提供されているが、老年人口比率が約60%であるため、一層の充実・強化を目指す。

3 - 7 教育及び文化の振興に関する事項

学校教育については、離島航路利用の通学生徒に対する補助を継続し、教育の機会均等に努める。

生涯学習活動については、集会所等を整備充実し、今後ともより一層の機会拡大と充実を図る。

歴史・文化的遺産については、平成11年11月に作成された「今治市歴史まちづくり計画」に基づき整備に努める。特に、来島については、設立が予定されている検討委員会により、今後の整備や活用について検討を行う。

また、小島の芸予要塞跡については、貴重な近代遺産として、郷土の歴史学習の場として活用されるべく、今後とも可能な限り現状維持に努める。

3 - 8 観光の開発に関する事項

瀬戸内しまなみ海道の自転車歩行車道を利用して行われている様々なイベントを通じて全国へ情報発信するため、イベントの継続的な実施を行うとともに、新たなイベ

ントについても検討する。

なお、馬島は自歩道の中継地点となっており、イベントの参加者や観光客などが数多く訪れていることから、遊歩道、キャンプ場など屋外型観光レクリエーション施設を整備するとともに、来島海峡大橋や来島、小島、馬島など島しょ部をめぐる遊覧コースの設定についても検討を進める。

また、来島海峡大橋の造形美や瀬戸内海の多島海美、豊かな歴史資源等を活用したまちづくりを進めるため、「今治市歴史まちづくり計画 来島歴史の道の整備」に基づき、名勝や瀬戸内海国立公園の第2種特別地域にふさわしい待合所やトイレの整備、水軍や芸予要塞の資料収集、遊歩道や案内板の設置などに努めるとともに、住民の協力を得て適正な維持管理を行い、来訪者に「おもてなしの心」が伝えられるよう配慮する。

本地域は、全て瀬戸内海国立公園内にあることから、開発にあたっては、優れた景観や島特有の自然環境の保全に十分留意する。

3 - 9 国内及び国外の地域との交流促進に関する事項

小島の「風の顔らんど」での活動を継続するとともに、施設の維持・拡充に努め、全国各地の様々な地域の子ども達との交流を今後とも深めて行く。

来島については、来島保存顕彰会を中心とし、来島水軍ゆかりの地域との交流を今後とも継続・拡充するとともに、伊勢、熊野、塩飽、五島列島など水軍ゆかりのまちとの交流を深め、水軍ネットワークの形成を図っていく。

3 - 10 国土保全施設等の整備に関する事項

海岸保全、急傾斜地崩壊対策については、今後、基本的には老朽施設の更新が主体となるが、中でも、小島の海岸保全施設は、老朽化や吸い出しによる機能劣化が生じており、その改修に努める。

馬島の火災で消失した山林については、下刈りや土砂流出対策などの適切な管理を継続する。

なお、これらの実施にあたっては、本地域全体が瀬戸内海国立公園に属していることから、自然環境の保全に留意した事業実施に努める。

3 - 11 そのほか、離島の振興に関し必要な事項

人口の減少や高齢化の進行による地域存続の危機を打開するため、地域の恵まれた自然環境等を最大限に活用した定住促進及びU J I ターン施策を検討する。